コロナ禍で発揮される図書館力――千葉県立図書館の場合

便利な図書搬送システム

コロナ禍の折、読書する人が増えていると聞く。図書館の重要性も増しているはずである。半面、開館自体が制限や閉鎖されている時期もあった。こうした動態とは直接の関係はないが、最近、千葉県立図書館の図書搬送ネットワークシステムの恩恵に浴した。今回は、その話題を紹介したい。

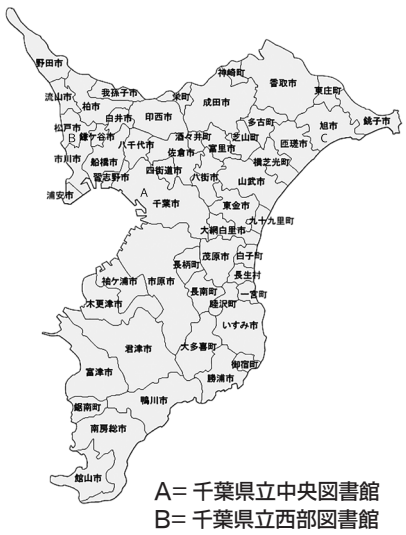
筆者は、本コラムの第9回と10回（「軽井沢で地域おこし」の意義」上、下）で、軽井沢の地元力の一つとして「朗読という文芸」について紹介した。その背景に、元NHKアナウンサーの青木裕子氏が2010年に軽井沢朗読館を開設し、また軽井沢町立図書館では、毎月土曜日に「館長 青木裕子朗読会」を行っていることがある。青木さんは、昨年4月からは名誉館長となったが朗読会は継続して行っている。

筆者は、『新エネルギー新聞』というメディアで、連載コラム『挑戦者の履歴書』を新たに始めた。そのコラムではアイウエオ順で人物を紹介するのだが、その第1回目が青木裕子さんである。原稿を書くに当たり、青木さんの著作や朗読素材を、自宅（松戸市）近くの千葉県立西部図書館で借りようとインターネット検索をした。彼女の著書『再婚トランプ』は西部図書館に蔵書としてあったので、朝イチで図書館を訪ね、借りることができた。

昨年11月21日に開催された名誉館長の朗読会には筆者も参加したが、その朗読素材は、正岡容（まさおかいるる）著の『置土産』であった。この素材は、ポプラ社の百年文庫の第4巻『秋』に収録されているが、同館に蔵書にはなく、アマゾンで購入してもコラムの原稿締切りに間に合わない。そこで、収録されている他の本を検索すると、『大衆文学大系』（短篇下、昭和48年刊）があり、千葉県立中央図書館（千葉市）と千葉県立東部図書館（旭市）に蔵書があるという。司書に「本の転送サービスはありますか？」と聞くと、時計を見て、「急ぎますか？中央のは無理だが、東部のは12時には当館（西部）に届きます。電話して確認しましょう。」と、何とも有難い返事。まるで天使の言葉のようだ。貸出依頼をお願いした。一度、帰宅し、午後イチ番には『置土産』を手にし、読み込むことが出来た。

青木氏には、2日程前に電話でインタビューし、個人情報ほかは把握していたため、もう一冊だけ読み込んでおきたい『軽井沢朗読館だより』があった。今度は、公立図書館を検索すると、松戸市立図書館の矢切分館に蔵書があるという。17時閉館に間に合うようにクルマを走らせ、手にすることができた。

これらを参考にし、翌朝には原稿を仕上げ投稿した。インターネット、電話、図書搬送システムなどの支援を得て、コラム原稿を無事書くことが出来た。



A= 千葉県立中央図書館
B= 千葉県立西部図書館
C= 千葉県立東部図書館

戦後初の移動図書館を設置した千葉県

千葉県立図書館の図書搬送システムについて西部図書館に照会し、公開情報を教示いただいた。千葉県は広い。県立図書館は、前述のように3館あるが、図書資料の搬送システムは、毎週火曜・木曜に、「中央」（8時）→「東部」（10時発）→「西部」（12時着）→「中央」（15時着）→「東部」（17時着）のコースで、3館間を、業者に委託し連絡車が巡回するという。筆者の場合、「東部」（10時発）→「西部」（12時着）のサービスを受けたのだった。このサービスは、図書返却のコースともなる。

県立図書館のこの搬送システムは、広域千葉県内の市町村をA、B、Cの3エリアに分け、それぞれ水曜、木曜、金曜に、図書館と公民館（センター）に中央図書館が発着で委託協力車が巡回している。さらに、千葉県内の県立高校や特別支援学校養護学校のほか私立高校にも宅配サービスが行われている。こうしたサービスは、千葉県では、「知の創造と循環型社会を生み出す公共の場」として位置付けている。

千葉県内の地域サービスの歴史は、戦後まもなく1959年（昭和24）8月に、全国初の移動図書館（名称「訪問図書館ひかり号」）が誕生した歴史がある。

県民、住民としては、危惧の念もある。宅配サービスの実践には、中央集約の方向性も感じ取れる。すなわち、財政効率化により県立図書館3館を中央図書館1館に集約するという〝サービスの切り捨て〟への懸念だ。図書館と文書館、さらには博物館や美術館などが、統合され「知識情報」などに包括されてしまう恐れである。情報とは、「情けに報いる」という原意をもつ。広い千葉県では、情報と人材の地域間格差が生じないように、努力と情勢を生かしてほしい。

【参考資料】『千葉県立図書館要覧』（令和２年度）
http://www.library.pref.chiba.lg.jp/R2-youran.pdf

地元力発見！⑫

佐藤建吉　「洸楓座」代表

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大大学院工学研究科准教授（金属疲労専攻）。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洸楓座」代表。「全国ふるさと大使連絡会議」理事